

ああ、異郷に散った妻と娘よ

福島県 遠藤新一

満州国官吏として、何不自由ないしあわせな日々を吉林省琿春街新安区の県舎で送っていた。女中を含めて七人家族だった。

昭和二十年四月、現地召集となり、朝鮮の京城宣武第二九一〇二部隊に配属された。敗戦の日から私どもの部隊は、そのまま朝鮮の治安・警備にあたることになった。

同年十一月、現地で召集解除となり、日本に引揚げることになった。引揚げるまでの間、部隊勤務の合間を見つけては、連日のように京城駅頭に出かけ、家族の消息を求めた。

「何かしらの手がかりでも」と、こつた返す群集の中を探し歩いたものだ。そして、ついにかつての県庁仲間の朝鮮人の知人から、私の家族が延吉の日本人小学校に集

結されているに違いない、という情報入手した。絶望の日々に、この上もない情報で大喜びした。この日のこととは四十五年後の今日でもあざやかに私の記憶の中よみがえる。

昭和二十年十一月、家族を残したまま私どもの部隊は、焼土化した祖国日本に引き揚げた。故郷に落ちつくとすぐに私は家族の消息を求めて外務省に行き、年に三、四回手がかりを求める努力をした。

ついに五年後、真摯の労がむくわれてか外務省から連絡があった。延吉の警察署長が日本に引揚げてくるから面会されたらのことで、さっそく外務省で面会した。その結果、延吉の日本女性に手紙を出すようにと教えられ、その人に手紙を出した。家族の写真、人相書を同封した。半年後その方から連絡が入り、長男勝一と女中のスズ子の消息が判明した。その半年後、長男勝一から手紙が届いたので、ただちに外務省で帰国手続きをした。

それから半年後、関係各機関のご配慮により、ぶじ長男勝一とスズ子が帰国できた。神戸まで出迎えに行き、ボロボロの服を着ていたので、市内で洋服を買い替えさ

せた。長男勝一から、妻と三女が死亡したこと、長女と次女は中国で養父に育てられている消息を得た。

それから、二年後、中国に残留した娘たちが一時帰国し、夢にまで見た兄妹妹の再会が実現できた。現在、長女と次女は中国で一家を構え、幸せに暮らしている。

しかし、私の心の中の戦後は未だ終わっていない。異郷の地で寂しく死んでいった妻と三女。そして、あるいは生きて再び会えぬかも知れぬ長女と次女。このような悲劇は、再び繰り返してはならない。これが私の遺言である。

玄海をこえて

栃木県 山中新一

昭和八年現役兵として北滿チチハルで教育を受け、予備役少尉に任官。陸軍省の選抜試験に合格、渡滿、満州国軍に日本軍官として奉職することになった。

昭和二十年八月九日、ソ連軍は、全滿州国の国境線を

突破、日本軍、満軍、開拓団を急襲、一方的侵略となつた。

そのとき、私は東安省の密山にいたが、八日新京（長春）に用務のため出発することになっており、東安の特務機関に立寄つた。

がぜん、機関内は騒然としており、密山南方の蜂蜜山国境監視隊がソ連軍に急襲され、かろうじて一人が脱出。私は新京出張どころでの話でなく、急ぎよ引返した。すでに部隊には撤退の命令があり、ぞくぞくと部隊、民間人は東安から汽車輸送。

東安、密山間は約十キロあり、その間に大河が流れていた。日本軍は、ソ連軍の追撃を考へて、鉄橋爆破のための工兵一個分隊を湖畔に残し、邦人渡河終了時点で爆破する計画であったが、奥地の開拓団には指示不徹底で、渡河以前に爆破してしまつた。そのための悲惨なかずかずの話が伝わっている。

東安駅から民間人、軍家族の一部は、最後の輸送車にかろうじて間にあつたが、駅近くにあつた多量の物資を格納していた貨物廠は、ソ連の略奪を恐れ、駅もろとも